

横浜市立大学・国際総合科学部公開教室セミナー「ナショナリズム論」  
特別講義 第2回  
2010年6月30日(水)10:30-12:00

**音楽のナショナリズムとインタナショナルリズム**  
—19～20世紀の労働運動・社会主義運動に注目して—

小野塚 和二(東京大学・経済学研究所)

はじめに

- 「音楽に国境はない」
  - (1)では、あらゆる音楽が世界中で普遍的(universal)に聴かれ、演奏されているか？
  - (2)ビートルズ、マイケル・ジャクソンなど「世界的」な音楽
  - (3)演歌やアジアン・ポップなど国限定・地域限定の音楽
- 「音楽には国籍がある」
  - (1)完全に無国籍な音楽は探すのが難しい。
  - (2)一見無国籍風でも、その曲・歌が生み出された固有の背景、特有の音楽イデオロム、演奏や伝播の形式などの点で、何らかのナショナルリティを帯びていることが多い。
  - (3)特に近現代(この二百年間ほど)の音楽はナショナリズムと結び付いてきた。
- 「国籍のある音楽はどのように国境を越えるか」
  - (1)音楽の越境と相互浸透
  - (2)意識的にインタナショナルであることを目指した音楽

本日のテーマ

- 国境と国籍のあった時代の音楽現象  
殊に、大衆的な音楽における国籍と国境  
＝音楽のナショナリズム
- 国境を越える音楽  
どのようにして国境を越えたか？
- 国境と国籍を超越しようとした音楽運動  
＝音楽のインタナショナルリズム  
そもそも「国際(international)」とは何か？

もう一つついでに、現在の商業化した音楽とナショナリズム／インタナショナルリズム

二つの映画

- 『カサブランカ(Casablanca)』  
directed by Michael Curtiss, scripted by Julius Epstein et al., presented by Warner Brothers, 1942.
- 『大いなる幻影(La Grande Illusion)』  
réalisation de Jean Renoir, scénario et dialogue de Charles Spaak & Jean Renoir, Paris-Studios-Cinéma, 1937.
- 『ラ・マルセイエーズ(La Marseillaise)』  
réalisation de Jean Renoir, scénario et dialogue de Jean Renoir, Carl Koch & N. Martel-Dreyfus, Paris-Studios-Cinéma, 1938.
- 『ラインの護り(Watch on the Rhein)』  
directed by Herman Shumlin, scripted by Dashiell Hammett on the original text by Lillian Hellman, 1943.

『カサブランカ』の歌合戦の場面

と き：1941年12月  
と ころ：仏領モロッコ、カサブランカのカフェ・アメリカン

チェコスロヴァキアの実ナチ抵抗運動の指導者ラズロ(Paul Henreid)は、ポルトガル経由でアメリカに亡命するため、妻イルザ(Ingrid Bergman)とともに戦火のヨーロッパを縦断して命からがらカサブランカ(ヴィシー政権フランスが支配する植民地)に辿り着いたが、そこで足止めを喰らっている。

通過ビザを獲得するために訪れた酒場カフェ・アメリカン(Café américain)では、ドイツ軍の将校たちが勇ましい軍歌を歌っている。中立地でドイツ人がのさばっているのが不愉快で仕方ないラズロは、酒場の楽隊に「ラ・マルセイエーズを演奏しろ」と注文する。ドイツの軍歌にフランス国家をぶつけることをためらったバンドリーダーは酒場の支配人の指示をあおぐ。

離れたところで車の次第を見ていた支配人リック(Humphrey Bogart)は、「やれ」というように頷く。楽隊の演奏が始まると、フランス人だけでなく、ヨーロッパ各地から集まっていた人々も声を限りに「ラ・マルセイエーズ」を歌うから、ドイツ将校の歌はかき消されてしまう。

予期せぬ歌合戦に敗れて憤懣やるかたないドイツ軍人たちを後目に、店内の人々は声もかれよと歌い続け、「フランス万歳」の大騒ぎとなる。

映画『カサブランカ』の陰謀

- 世界の縮図のようなカサブランカのこの酒場で、なぜ、ラズロは「ラ・マルセイエーズ」をドイツ将校の歌にぶつけようとしたのか？
- なぜ、フランス人でない者たちまでが歌い、熱狂したのか？  
この場面では、「ラ・マルセイエーズ」は単にフランスの国歌ではなく、全世界の人々が希求する自由・人権・民主主義を象徴しており、ドイツ将校たちの歌には逆に圧制・暴虐・全体主義のイメージが付与されている。アメリカの青年たちを「自由の戦士(freedom fighters)」に仕立てて戦場に送り出す装置。  
実は、この映画の25年前にも、一部のアメリカ人たちは、これら二つの歌へ対称的なイメージを与えていた。
- では、ドイツ将校の歌は本当に「圧制・暴虐・全体主義」の歌なのか？ 「ラ・マルセイエーズ」は「自由・人権・民主主義」の歌だったのか？

⇒映画『カサブランカ』の陰謀から離れて、二つの歌は、どのようにして生まれ、歌われ、聴かれたのか調べてみよう

## 『大いなる幻影』にも同じ二つの歌が登場する

ここでは、二つの歌は、『カサブランカ』よりも淡々と描かれている。一方はドイツ人の歌(「ラインの護り」)、他方はフランス人の歌。それぞれのネイションの歌(国歌)として対等・無差別に冷静に扱うことによって、ネイション/ナショナリズムを超えたオルタナティブの誕生を予感させる。

しかし、人民戦線期(1930年代後半)のフランスでは歌のナショナリズムに対して冷めていて、第二次大戦中のアメリカでは二つのネイションの歌に対称的な価値を割り振るのが通例だったというわけでもない。

⇒映画『ラ・マルセイーズ』(1938):敵愾心・猜疑心にハリネズミのようにふくれあがったナショナリズム

映画『ラインの護り』(1943):愛国的だが反ナチのドイツ人

7

## 「ラ・マルセイーズ」の誕生と普及

誕生:1792年4月25日、ストラスブール(アルザス)

ディートヒ市長の要請に基づき、作詞・作曲ともにルジェ・ド・リール(Claude-Joseph Rouget de Lisle, 1760-1836)。原題は「ライン方面軍の戦いの歌(Chant de guerre pour l'armée du Rhin)」。

- なぜアルザスで生まれたのか? アルザスはフランス国内のドイツ語圏であり、アルザス人は「敵(ライン河の対岸)に内通する危険性のある人々」と思われていた。⇒「フランス人」であることを疑われたいための一層の忠誠心を誇示する必要。Cf.ドーデ『最後の授業』
- 野蛮で血なまぐさい歌詞。敵愾心、猜疑心が横溢。(資料1)
- 普及:同年夏までにフランス全土に、パリにはマルセイユ義勇兵(La Marseillaise)の歌として普及。これを歌うことで「フランス人」に。
- 侵略:ナポレオンとともに中東欧へ  
シューマン「二人の擲弾兵」、チャイコフスキー「1812年」、トルストイ『戦争と平和』等々、フランスの攻撃性についてさまざまな記憶。
- 「革命:『市民』→外敵と裏切者→革命防衛→歌→国民形成→輸出・侵略」

8

## 「ラインの護り」の誕生と普及

- 誕生:詞は1840年(Max Schneckenburger, ヴュルテンベルク)、合唱曲としては1854年(Karl Wilhelm, クレーフェルト)
- 詞は「ラ・マルセイーズ」に比べると敵愾心・猜疑心よりも、高度に自己陶酔的な愛郷心(愛河心?)。(資料2)
- 普及:ドイツ帝国形成(1871年)以前に、事実上の国歌になるほど、全土に急速に普及。
- 侵略:ドイツ帝国形成以前に、普仏戦争(資料3)でライン河を越えて侵略。
- 第1次大戦前にはあまりにも有名な国歌・軍歌に(資料4)、第2次大戦終了まで。
- ライン河の西側の外敵→国民形成の「呼び掛け」(フィヒテ)→ナショナルな歌の誕生→国家形成・侵略。  
他方で君主讃歌は早くから輸入(イギリス国歌の翻訳・別メロ)。

9

## 国外へ伝播する二つの国歌

- 1871年秋、イングランド北東部ニューカスル九時間争議の際の「ラインの護り」(資料5, 6)
- イギリスの労働運動歌へ(E. Carpenter ed., *Chants of Labour*, 1888)(資料7)
- 「ラ・マルセイーズ」も各国で労働運動・社会主義運動の歌として定着(資料8, 9)。第一次大戦前に、イギリスだけでなく、ドイツ(Reveille, Achtsunden-Marseillaise)、イタリア、スウェーデン、ロシアへ。ロシアの1917年革命では事実上の国歌となり、同年11月に「インタナショナル」に交代する。

10

## 労働運動・社会主義運動における音楽のインタナショナル

- 19世紀後半～20世紀前半の国民運動、民族運動、労働運動・社会主義運動、学生運動は実にさまざまな歌とともにあった。歌を最初に運動に組み込んだのはドイツ語圏やイタリアの国民運動(国家統一運動)や中東欧諸地域の民族運動で、そこで生み出された歌は他国のさまざまな運動に転用されて国境を越えた。
- 殊に19世紀末以降の世界各地の労働運動・社会主義運動は多くの歌を共有した。
  - 自前の歌、例えば「インタナショナル」(Pierre Degeyter, *L'internationale*, 1888)もあるが、多くの学生歌(*Varsovienne*)、国歌(*La Marseillaise*, *Wacht am Rhein*)、民謡(*Tannenbaum*)、賛美歌が運動歌に転用され、各国で同時に歌われた。日本はやや遅れるが、第一次大戦直後には日本語歌詞で歌われるようになった。運動の方向は違っても、運動の大義に人々を情緒・感性の面で動員するという歌の機能は同一で、詞を少し改変すれば容易に転用できた。

11

## 労働運動・社会主義運動の音楽はなぜ国際的だったのか?

- 労働運動・社会主義運動は元来、合理主義・主知主義的な性格が濃く、社会主義の理想も、資本主義社会の矛盾も、労働者が社会的な自己主張を刷ることの正当性も、すべて理性的の言葉で語られた。
- しかし、それだけでは、多くの人を短期間のうちにひきつけることはできない。
- しかも、労働者を国民運動や民族運動から引き剥がして労働運動・社会主義運動の大義に目覚めさせるには、国民運動・民族運動と同様に、人々を情緒的・身体感覚的に揺り動かす装置を必要とした。
- すでに国民運動等で用いられた歌は人を身体感覚的に動員する道具として有効であることが証明されているから、その詞を変えれば手っ取り早い。
- 国民運動のナショナルな個性は詞を変えて消してしまえば、どこの歌でも利用可能。

12

### 第一次大戦と歌の国際性

- 「ラインの護り」:初期の西部戦線では英独双方の塹壕で歌われていた(イギリス側ではさまざまな替え歌として)が、イギリス側では、それがドイツの国歌であることを知って歌わなくなる。
- 同様にして独仏相対する塹壕地帯で、「ラ・マルセイエーズ」はドイツ人労働者がいかに親しんだ歌であっても、歌うことははばかられたであろう。
- 1917年に参戦したアメリカの将兵のうち、イエイル大学出身者は自分たちの校歌の元歌がドイツの国歌であることを知って驚き、終戦後、そのメロディを「ラインの護り」から「ラ・マルセイエーズ」に変えようとさえした。結局、同窓会の反対で生き残る。
- 第一次大戦は労働運動・社会主義運動にとっても、その歌の国際性にとって躓きの石となった。
- 「ラ・マルセイエーズ」の方は第一次大戦後もイギリスを含む多くの国の労働運動・社会主義運動で生き残ったし、「インターナショナル」、「赤旗の歌」、「国際学連の歌」なども同様。

13

### 現在も歌われる「ラインの護り」

- イエイル大学校歌”Bright College Years”  
1881年に、同大グリークラブ会長(John F. Merrill)が「ラインの護り」のメロディを示して、学級詩人のHenry S. Durandに作詞を依頼して、校歌が誕生した。
- 同志社大学カレッジ・ソング”One Purpose, .....For God, for Doshisha, and Native Land.”  
1908年にイエイルの校歌から又借り。
- 日本では、軍歌・愛国歌やナチス・ドイツの文化的シンボルを愛好するホームページ上では、「ラインの護り」は東ドイツ国歌(“Auferstanden aus Ruinen” von Hanns Eisler)や1944年以降のソ連・ロシア国歌と共存している。

14

### 第一次世界大戦後の音楽の国際性

- 第一次大戦前に、同じ歌が国境を越えて歌われる機会は、労働運動・社会主義運動か、特定宗派の賛美歌に限られていた。
- 第一次大戦後は、労働運動・社会主義運動の歌は復活するが、それ以上に、大衆の歌を取り巻く状況が一変した。
- 円盤式レコード、公共ラジオ放送、有声映画(トーキー)の普及によって、同じ(ような)歌が世界中(ヨーロッパ、アメリカ、日本の都市)で聴かれるようになった。
- ソ連と他国との間の国交は細く、市民レベルの交流はほとんどなかったが、似たような歌や同じ歌が、日本、ドイツ、ソ連と体制を越えて流れていたし、イギリスのパラード歌手がソ連で活躍するといった現象もあった。

15

### 1930年代の社会主義運動における音楽の国際性

- レコード、放送、映画を通じて商業化した音楽が世界を同時に流れるという現象は現在まで続いているが、1930年代から第二次大戦期、さらに戦後に掛けて、社会主義運動は再び音楽の国際性を担うことになった。
- ドイツ、フランス、イタリア等でファシズムの諸党派が、集会や街頭行進で音楽を効果的に用いて支持を広げたのに対抗して、社会主義・自由主義の諸党派は大団団結して「人民戦線(People's Front, Popular Front)」を結成したが、音楽面でも人民戦線が出現した。
- 1935年、国際労働者音楽オリンピック  
各国の音楽団体が独仏国境のストラズプール(「ラ・マルセイエーズ」の誕生した場所)に集った。
- 1936年、イギリス労働者音楽協会の創設  
音楽の国際交流を積極的に展開

16

### 第二次世界大戦とその後

- 「ラインの護り」の侵略性と、「ラ・マルセイエーズ」による対抗(『カサブランカ』の世界)
- 連合国(アメリカ、ソ連、イギリス)間の戦争協力と音楽協力。殊にソ連音楽の積極的な紹介。
- 戦後のドイツでは、ナチスの党歌ホルスト・ヴェッセル・リート「旗を高く掲げ」だけでなく、「ラインの護り」も事実上歌えなくなった。さらに、戦後再制定された東西ドイツそれぞれの国歌はどちらもあまり歌われなかった。
- 敗戦国ドイツだけでなく、イギリスでもフランスでも国歌は流行らない。イギリスは制定国歌ではないから強制の根拠はない。フランスは法で国歌を制定しており、ときどき文部省が指導・通達しなければならぬほど歌われない(ただし処分はなし)。野蛮さが嫌われている。

17

### むすびにかえてー音楽の国際性の現在

- 商業的な国際性、ただし人々が意識的に求めたインターナショナルイズムではないー労働運動・社会主義運動の衰退
- ナショナルな音楽も全体としては衰退。国歌、愛国歌、民族歌は先進国ではほとんど歌われない。  
cf.ベルギー  
cf.国粹主義者・戦争賛美派の集会
- 特に統合の進む過程でヨーロッパでは、ナショナルな歌で団結心や敵愾心を確認する機会はほぼ絶無に。  
サッカーなどスポーツの国際試合がほぼ唯一の生存例
- インターネットの発達で国際的なNPO・NGO等の活動は音楽抜きビジネスライクなものに。主義主張としてのインターナショナルイズムを情緒的・身体感覚的に共有する装置を欠いている。

18

参考文献

- 小野塚知二「ナショナル・アイデンティティという奇跡 —二つの歌に注目して—」廣田功・永岑三千輝編著『ヨーロッパ統合の社会史 —背景・論理・展望—』日本経済評論社、2004年.
- 小野塚知二「作曲家アラン・ブッシュとイギリス労働者音楽協会の設立 —音楽の国際性と「人民戦線」—」『横浜市立大学論叢』(人文科学系列)第60巻第3号、2010年.